

『華嚴経』と日本古代国家

中 林 隆 之

The *Avatamska Sutra* and Ancient Japan

Takayuki NAKABAYASHI

Abstract

Sixty volumes of the Avatamska Sutra were received and distributed in the Japanese islands up to the seventh century, as were eighty volumes up to the eighth century. Based upon this work, Emperor Shomu, Empress Komyo, and others accomplished such feats as constructing Todaiji Temple and the Birushana Buddha. A reading system was also provided for all sutras focusing on the Avatamska Sutra premised upon copying the complete Buddhist scriptures around the time of the construction of the Great Buddha and the founding of the Six Sects of Nara, led by the Kegon sect, as an organization of learned priests managing their portion of the reading. Among the sutras for the Kegon Sect, the leader of the Six Sects, to read were the Avatamska Sutra and its different versions and partial versions, but, in addition to these, the Tathāgatagarbha Sūtra, the BhūmiSūtra and the Lankavatara Sutra Buddhist scriptures were also significant. In addition, annotated documents were not written only by Hozo, who successfully completed the Tokagenshu; there were also many writings by Wonhyo of Silla. For many of the Kyoron for reading, the Shorai Kyoron from Tang China were copied as original texts. For annotated documents, however, many original texts were obtained from Silla such as sutras in the possession of Shinsho. With the Shingon and Tendai sects flourishing in the Heian Period, even while its teachings were changing, the Kegon Sect continued to maintain some influence through such activities as those of the Todaiji, Yakushiji, and Kaiinji Temples.

はじめに

今回の発表テーマは、「日本古代における『華嚴経』の意義」である。そのことを以下の三つの角度から考えてみたい。第一は、『華嚴経』の受容と活用の政治的・社会的な含意について。とりわけ『華嚴経』と王権・国家との関係のあり方に注目したい。第二に『華嚴経』を、古代社会に流通した諸思想全般、すなわち仏教経典・教学はもとより、仏典以外の典籍・学問・思想などとの関係の中に位置づけながらその推移を把握する。第三に、『華嚴経』をはじめ

とした関連の漢訳仏典やその注釈書（章疏類）にみられる教学の受容のあり方について、東アジアの地域世界、具体的には唐・新羅・渤海などとの関係を踏まえてみていく。以上の観点から、日本古代における『華嚴経』とその関連経典およびそれらの教学の果たした役割について概括的に論じてみたい。

1. 『華嚴経』の受容と東大寺大仏

『華嚴経』そのものの受容の概略から押さえておこう。『華嚴経』という文言の初見は、『続日本紀』養老六年（722）十一月二十九日条である。この日、

律令国家は、故元明太上天皇の追善を主目的として、『大集経』『大菩薩藏経』『観世音経』らとともに『華嚴経』八十巻の書写と京内諸大寺での読経を命じている。漢訳『華嚴経』には、旧訳本（東晋仏陀跋陀羅訳）と、新訳本（唐の实叉難陀訳）があるが、この記事では八十巻とあるので、新訳経典であったことがわかる。新訳本は承暦二年（699）に漢訳されているが、それからさほど経過しないうちに将来されたことになる。

他方、旧訳本は「正史」にはあらわれず、受容の時期は明らかにしえない。しかし、正倉院文書では、皇后宮職管轄下の写経所の写経事業に関わって、天平三年（731）～四年にかけて新旧両経典が書写された記録がある。天平十五年（743）ごろまでに作成されたとみられる皇后宮所蔵経典に関する出納目録（「経巻納櫃帳」）にも、新訳とともに豪華な装丁の旧訳本もみえている。また、すぐ後に述べるように、東大寺前身寺院の一つである金鍾寺（ほどなく大養徳国金光明寺となる）では、天平十二年（740）より、旧訳本の講説が審詳により始められている。旧訳本の漢訳は東晋最末年の元熙二年（420）なので、かなり早くから伝来しうる条件があったことがわかる。

以上を勘案するに、「正史」に旧訳本がみえないのは、おそらくは、それが既にかなり早い時点で日本（倭国）に伝わっており、いちいち「正史」に記録する必要がないほど社会的に流布していたことによるのだろう（宮崎 06）。聖武天皇の大仏造立の直接的契機の一つとなった河内国大県郡の知識寺でも、塑像とみられる「盧舎那仏」の造営がなされていた（田中 77）。これも旧訳『華嚴経』の教主を、経典にみられる「善知識」の方式で、おそらく河内地域に最も卓越する渡来系氏族を中心とした広範な社会的基盤を背景に造立されたものとみられる。

『続日本紀』天平勝宝元年（749）十二月丁亥条によると、聖武は、天平十二年の河内行幸において知識寺の盧舎那仏を礼拝して自身でも造営したいと念願し、天平十五年十月に紫香楽にて大仏建立詔を発している。その詔では旧訳本の教主「盧舎那仏」の金銅像を建立するとしている。ただしその後、正倉院文書によれば、平城京での大仏建立中の天平勝宝元年（749）六月八日の造寺司次官の宣では、大仏「前尊（臺?）」に旧訳本・新訳本がともに安置されたことが知られる。そして天平勝宝四年（752）

の東大寺大仏の開眼供養会に際しては、東大寺写経所が、松本宮から「為_レ供養大会日_一」に「花嚴経一部八十巻」を奉請している。また供養会直前（四月八日が予定され実際には翌九日に開催）の同天平勝宝四年閏三月二十八日付で、写経所が新訳の注釈書である恵（慧）苑の疏一部二十四巻（『続華嚴略疏刊定記』）について、「今為_レ供養大会日_一、応_レ奉_レ返_レ如_レ前_一」として、供養会で使用する新訳の講説用の疏の返却請求をしている。このように、次第に新訳本が重視されていく様子が見えてくる。もっとも、開眼会直後の同年六月にも、旧訳本・新訳本がセットで書写されており、この時期には、旧訳本・新訳本ともに活用されたことが知られる。

周知の如く、『華嚴経』の「知識」の論理は、国家が主導し行基やその信者を巻き込みながら遂行された盧舎那大仏や東大寺の造営といった王権主導の仏教事業での物資や労働力の徴収に際して、税や労役を補完する手法として積極的に活用された。また、平城還都で再開された大仏建立事業では、宇佐八幡神も造営に助力し（直木 55）、東大寺二月堂で天平勝宝五年（753）より開催された十一面悔過会には、若狭遠敷神も参加している（中林 07a）。東大寺では、大仏造営事業や諸法会の開催を梃子として、「知識」形式により有力諸神祇をも包摂していこうとしたことがわかる。

もちろん『華嚴経』の「知識」の論理は、物資や労働力の徴収・動員のための論理のみならず、当然ながら宗教的側面、すなわち、王権主導の仏教教学の振興や社会・政治的レベルでの仏教を軸とした思想統合の面でも重視された。『東大寺要録』によれば、聖武が河内国大県郡の知識寺の盧舎那仏を礼拝したと同じ天平十二年に、金鍾寺において、聖武の四十歳の満賀のために良弁が『華嚴経』の講説を企画し、結果、審詳が講師として招請された。審詳は新羅への留学経験を有した僧で、もともとは大安寺に所属していた（最終的には大養徳国金光明寺に遷り、そこで自寂した）。その審詳は、慈訓らを複師として同年から三年間にわたり旧訳六十巻本を講じ、初講の際には聖武・光明子らも臨席して多くの御衣や綵帛を施入したという。以後、講師を交替しながら天平二十一年（749）まで旧訳『華嚴経』六十巻を中心とした講説が続けられたとされる。そして天平十六年（746）には聖武が「降_レ勅百寮_一」し、「知識花嚴別供」を開催して二百町余の水田を施入し

たという（堀池 80 初出 73）。以上の『東大寺要録』の記載は、天長七年（830）に勅命を奉じて撰進された「天長六本宗書」の一つである普機撰の『華嚴宗一乗開心論』にもとづき書かれたものなので、一定の事実が反映されているとみてよい（家永 94 初出 38）。すなわち、天平十六年までには、広く官人層を巻き込んだ「知識」形式の『華嚴經』の供養会が、王権により財源を付与される形で推進されることとなったわけである。なお、こうした動きは、紫香樂での大仏建立の頓挫によって再編された可能性があるものの、それは金光明寺（東大寺）での大仏建立再開とともに、『要録』で「華嚴別供」と称された天平十二年以来の供養会を発展させる形をとって継続された。正倉院文書中の天平二十年（748）九月九日付の牒で確認できる「花嚴供所」は、この「別供」のための組織で、これが後述する南都六宗の筆頭たる花嚴宗の母胎となっていくとみられる。

2. 『華嚴經』と教学・思想編成

次に、古代国家による『華嚴經』の位置づけについて、仏教教学総体やその他の諸学問などとの関係の中で考えてみよう。

古代国家は、八世紀の前半までには、遣唐使や留学僧らを通じて知った唐での仏典漢訳事業 - 教相釈釈やそれらを踏まえた欽定入蔵録の整備と諸「宗」の形成・展開の様相、および新羅との交流により知り得た新羅王権の仏教興隆の動向などをみすえ、内裏や皇后宮職などでの将来經典にもとづく一切経書写事業や、その教学の編成と仏教の専門的担い手集団となる学僧の育成に取り組み始めた。

一切経の書写事業では、正倉院文書の本体たる東大寺写経所の事務帳簿群を成立させた光明皇后発願の「五月一日経」が著名である。これは、遣唐留学僧であった玄昉が『開元釈教録』に収録された經典類を買い求め、天平七年（737）に日本にもたらした五千巻余の經典群を主な底本として、皇后宮職系統の写経所（これがのちに東大寺写経所となる）が始めた事業である（皆川 12 初出 62）。また、それとは別に聖武が遂行していた内裏系の一切経書写事業でも、玄昉の帰国後には、彼の将来經典をもとに事業が継続されたことが知られている（栄原 00 初出 94）。

さて、その天平六年の内裏系の一切経書写に際して經典に付された跋願文によれば、聖武はあらゆる

「経史」（漢文典籍）の中で、「釈教」とりわけ『華嚴經』に代表される「一乗」系（如来蔵系）の教学を最上とし、一切経を書写した旨を述べている。ちなみに、これに前後して古代国家は、仏教以外の陰陽・医術・七曜・頒曆などの諸学業も奨励している（『続日本紀』天平二年三月辛亥条）。そうした動向を踏まえてこの聖武の跋文をみると、その意味は、聖武が、仏教（漢訳仏典）を諸思想の頂点に置くことを宣言するとともに、それを前提に仏教を含むあらゆる漢文典籍にみられる知識・思想の「一乗」教学を軸とした序列づけをも意図したものと考える。

その後、大仏造立事業遂行のさなかの天平感宝元年（749）閏五月癸丑（二十日）に、そうした国家的方針の集大成ともいべき詔が出された。ここで聖武は「太上天皇沙弥勝満」と自称して出家の意思を示しつつ、自身が従う仏教の教説の中で「以_二花嚴經_一為_レ本」ことを宣言している。そして『華嚴經』を基軸として、「一切大乘小乗経律論抄疏章」（文字通り現存する一切經典類すべて）の「未来際」に至るまでの転読と講説を命じ、それを実現するための財源として、東大寺や大安寺をはじめとした平城京および畿内近辺の十二の官大寺に、墾田地や稲・綿など多くの資財を施入している（『続日本紀』同日条）。古代王権は、『華嚴經』を頂点としたあらゆる仏教の教説の恒久的な講読体制を構築し、その普及によって、君主聖武自身の長寿と、天下太平を祈念しようとした（中林 07b）。

そして、この詔による『華嚴經』を根本とした仏法総体の教学的編成を実現するために、一切經典の転読と講説を分担するための枠組みと、分担講読を実践する中央学僧集団たる南都六宗の体制的な整備が進められた。六宗とは、花嚴宗・法性宗（法相宗ではない）・三論宗・律宗・俱舍宗・成実宗を指す。天平勝宝三年以降、詔の財源をもとに「布施法」が定められ、宗ごとに転読・講読すべき經典類が割り振られ、講読すべき各經典ないし經典グループごとに講師・複師に支給する布施額が設定されている。正倉院文書には、六宗のうち花嚴宗・法性宗・律宗・俱舍宗分の、そうした講読分担すべき經典群リスト（布施勘定帳）の下書きが残っている。

「花嚴經為本」を体現し、六宗の筆頭と位置づけられた花嚴宗の講読担当經典類とその講読に際しての講師・複師らへの布施額を定めた「華嚴宗布施法定文案」は、天平勝宝三年（751）五月二十五日の

日付を有した経論を記した解案の後に、章疏類の書目が貼り継がれたものである（【表】「華嚴宗布施法定文案」記載経論・章疏を参照）。

注意すべきは、ここにみられる講読担当の経論や章疏類の性格である。経論の部分には40部が記載されているが、その冒頭には旧訳の『華嚴経』、次に新訳本、以降には『華嚴経』を構成する諸品の別訳（別生経）が、ほぼ開元釈教録の掲載順に配列されている。しかしそこには、『如来蔵経』（【表】26）『不増不減経』（【表】28）『金剛三昧経』（【表】29）や『大乘起信論』（【表】36・37）『法界無差別論』（【表】38）『入大乘論』（【表】39）『三无性論』（【表】40）などの経論もみられた。これらは、旧訳『華嚴経』性起品の論理から派生した「如来蔵思想」（高崎83・松本89初出86）の教説を説く経・論である。これらが『華嚴経』系経典と共に、一括して華嚴宗の講読担当経典として配置されている。また、そこには『十地経論』（【表】34）『入楞伽経』（【表】22）もみられた。『十地経論』は唐華嚴宗の源流となった地論宗（地論学派）が主たる研究対象とした世親の論典で、『華嚴経』の一部である『十地経』を瑜伽行派の立場から注釈したものとされ、『入楞伽経』は、如来蔵思想と唯識思想とを融合を試みた経典で、地論宗以前に成立し、それらに影響を与えたものとされている（青木10）。つまり、花嚴宗の講読対象とされた経論の配置の特徴は、『華嚴経』（およびその別生経類）を中心としながらも、それらと、如来蔵系・楞伽経系の思想内容を持つものがほぼ一体となって構成されている。

この点は、章疏44部の記載内容からも明瞭に確認できる。そこには、一連の新旧『華嚴経』の疏の他に、『大乘起信論疏』（【表】56～58、61～63）や、『如来蔵経疏』（【表】53）『金剛三昧論』（【表】64）『不増不減経疏』（【表】54）などが配置されていた。これらはいずれも如来蔵系の経論の注釈書である。また、『五門十地実相論』（【表】66）は、『十地経論』の注釈とみられるが、地論宗南道派との密接な関係が指摘されている（石井96a、青木10）。さらに、やはり『楞伽経』の疏も多い（【表】46～52）。章疏部には、これら如来蔵系・楞伽系の疏が『華嚴経』の疏とならんで華嚴宗の講読対象とされていた。

なお章疏部では、唐華嚴宗を大成した法蔵の著作が多くみられるのは言うまでもないが、そのみならず、新羅元暁の著作も多い点が重要である（【表】

44・46・54・62～64・67～69・71）。もちろん法蔵も元暁の教学を高く評価している。しかし、唐華嚴宗を大成した法蔵の場合、あくまでも至上の地位にあるのは「円教」とされた『華嚴経』であった。これに対し、「和諍」を主唱した元暁は、『大乘起信論』や『如来蔵経』『金剛三昧経』などの如来蔵系の経論と『華嚴経』とをほぼ同等に評価している。また彼が63『起信論別記』で説く唯識説は、『四卷楞伽経』『十卷楞伽経』によるところが大きいと指摘されている（石井96b）。このように元暁の学説は、法蔵の大成した唐華嚴宗とは教学理解を異にする部分がある。

南都六宗の筆頭である日本の花嚴宗の場合、講読対象として選定された経論・章疏類は、上記したように華嚴系と如来蔵系・地論系・楞伽系のものが一括されているので、その教育的特徴は、法蔵のものを踏まえつつも、実質的にはむしろ、新羅元暁の論理に近い形になっているといえよう。

また花嚴宗担当の章疏類には、元暁の撰述書の他にも、大行（【表】60）・表員（【表】79）など新羅出身の学僧の著述もみえる。このうち79表員撰『華嚴経文義要決（問答）』は、地論宗南道派に密接する内容だとされる（石井96a）。

なお、新羅の学僧らの章疏類を重視したのは、花嚴宗の場合だけではない。法性宗は、「法性」の論理を軸に、花嚴宗とも密接に関わる『勝鬘経』『大集経』などの如来蔵系・地論宗南道派が重視した経典（石井96a・b）や、大量の瑜伽行派（唯識）の論典、また『最勝王経』『法華経』などの護国経典、さらに多数の雑密系経典、およびそれらに関する章疏類の講読を担当する宗である。その章疏部には、やはり元暁の疏がいくつも確認できるが、他にも円測・勝莊・璟興といった新羅学僧の撰述書も多く含まれていた。

3. 日本古代の「知」の源泉と新羅 —将来経典の入手経路—

古代国家は、一切経の書写とともに、南都六宗の整備事業に活用するため、天平勝宝三年ごろまでに寺院や僧尼の経典所蔵状況を集中的に調査し、それらを本経として借用している（中林13a）。南都六宗で講読を分担すべき経典類は、その過程で書写・整備されていった。その際には、とりわけ、各宗の

教学面での内容の充実のために、章疏類の整備に力点が置かれた。

花嚴宗の講読担当仏典の整備の動きもその一環であるが、そこでは、とくに金鍾寺における『華嚴經』講説の初代講師となった審詳や、複師となった慈訓の所蔵した仏典が重要であった。慈訓については、その經典類の入手経路は不明だが、彼の持つ『華嚴論』や『金剛三昧經論』などにより、花嚴宗の章疏が構成されたことが知られる。

しかし、より注目すべきは、やはり審詳の所蔵經典であった。審詳経の多くは、彼の留学先であった新羅より将来されたものであったことが指摘されている（堀池 80 初出 73）。

また、正倉院文書中に残る天平二十年（748）六月十日付の全文一筆の「更可請章疏等目録」は、内裏が僧綱の検定の下で審詳の所蔵典籍をその管理者たる東大寺平撰の住房に貸し出しを求めた目録の写しである（中林 15）。そこで請求された論・章疏のうち、元暁述の『不増不減經疏』（【表】54）、同『一道章（一道義章）』（【表】67）、同『二障章（二障義章）』（【表】69）、十地五門師述『十地五門実相論』（【表】66）、智嚴述『華嚴孔目』（【表】73）は、「華嚴宗布施法定文案」の選定の際に活用されたと考えられる。このほか、審詳や慈訓は新旧の『華嚴疏』や『大乘起信論疏』も有しており、いずれも内裏や東大寺写経所に盛んに貸し出している。これらも花嚴宗の担当章疏類の選定に使われた可能性が高いだろう。

ちなみに、審詳はいわゆる外典も多数所蔵しており、これも内裏に貸し出された。その外典を含んだ将来典籍類は、七世紀後半以降とくに交流を深めた新羅との国家間関係や、それを背景とした学僧・俗人間の国家の枠を超えた「師友・同学」関係の歴史的形形成に裏打ちされたものであった（中林 11）。

日本古代国家が主導した、南都六宗という教学・思想の枠組みとその担い手集団の確立に際して、唐から将来された一切経が重視されたのは言うまでもない。しかし、他方、花嚴宗を筆頭とした各宗の具体的な教学内容面の充実を図るための論・章疏類の整備事業に際しては、新羅からの将来典籍も大きな役割を果たしていたのである。

4. むすびにかえて—平安期の華嚴宗—

以上に示したように、八世紀半ばの日本古代王権

は、仏教を主軸に置いた思想政策を展開し、そこで『華嚴經』・花嚴宗はその頂点に位置づけられていた。最後に、その後の動向について概観することで結びにかえたい。

南都六宗は平安期には再編され「八宗」となった（ただし俱舎宗・成実宗は実質的に、法相宗・三論宗に編入される）。その中ではとりわけ、新たに整備された真言宗や天台宗が隆盛した。ただし、真言密教の本尊の大日如来は、『華嚴經』の本尊と同じ毘盧遮那仏であり、教学的にも共通する部分が多い。空海は、自著『秘密曼荼羅十住心論』では、華嚴宗を真言宗の次に位置づけている。一方、最澄は、華嚴教学の研鑽の中で天台智顛の学説に引かれて日本天台宗を開基した。また天台宗が依拠した『梵網經』の名称も厳密には『梵網經盧舎那仏説菩薩心地戒品第十』という。これらのことにも示されるように、両宗の教学は、もともと華嚴教学に親近していたわけである。また、東大寺でも真言院が設立されるとともに、尊勝院や東南院などの塔頭（子院）を中心に、仁和寺や勧修寺など密教系寺院とのつながりを強めていく。

真言・天台両宗の密教系教学の展開を支えたのは、遣唐使・新羅商船などとともに帰国した「入唐八家」により唐からダイレクトにもたらされた經典・儀軌類であったが、その中で、密教的色彩が濃いとされる般若三蔵訳『華嚴經』入法界品 40 卷や、関連する華嚴系の章疏・儀軌類も将来されている。しかし、この時期、經典類を含む唐文物を将来する上で、渤海使が果たした役割も忘れてはならない。貞観三年（861）に来日した渤海使李居正が『尊勝咒諸家集』や『仏頂尊勝陀羅尼記』を将来し、それらが石山寺や東寺に所蔵されたことなどは、その典型的な事例である。これら『仏頂尊勝陀羅尼』系の經典類は、『華嚴經』に由来する「清涼山」の別名を有した唐五台山の文殊菩薩信仰と密接なつながりを有しているとされるものである（朴 10）。

これらの動向を受け、平安期の華嚴宗も新たな展開をみせる。すなわち、南都では平安期でも、東大寺のみならず薬師寺での華嚴宗の活動が史料上確認でき、東大寺と薬師寺の華嚴宗は互いに教学面で競い合ったことが知られている（金 05、07）。また九世紀初め、新羅で加耶山海印寺が創建されたことを受け、おそらくそれに対峙するため、日本でも、空海の弟子で真言密教にも造詣の深い華嚴宗僧の道雄

が、王権の支援を受けながら平安京近郊の山城国乙訓郡に海印三昧寺を建立し、それが定額寺とされている（なお海印寺は11世紀初頭ごろまで、座主を中心に活動し、華嚴宗全体の中でも一定の影響力を保持していた）。また道雄は華嚴宗年分度者制度の充実も提言し、勅許された（中林13b）。

さらに、十世紀初頭に王権の意向をもとに各宗が作成した章疏目録である「五宗録」の中には、東大寺円超撰の「華嚴宗并因明章疏録」がある。そこに収録された華嚴宗担当の章疏類を一覧すると、それが奈良時代に比して倍以上に大幅に拡充されたことがわかる（花嚴宗分44編→華嚴宗分135編）。また「五宗録」段階では、直接『華嚴經』に関わる章疏類や、唐の法蔵やその法系の学僧が重視した著述類が拡充されていた一方で、南都六宗段階に重視された楞伽系や、『大乘起信論』系統以外の如来蔵系の章疏類はほとんど削除されていたことも判明する。つまり、華嚴宗の教学内容は、一部新羅義湘系のものを受け入れつつも、大枠では奈良時代に比し、九世紀前半までの唐華嚴宗の論理により近いものに改編された。なおその際、教学内容の変容を担った新たな章疏類の将来が、新羅海商の支援のみならず、上記した渤海との交流に媒介されたものであった可能性も、十分に考慮すべきと思われる。

以上のように、『華嚴經』は諸宗から重視されつづけ、華嚴宗も、平安期以降も、次第に密教色を強めながらも、南都の東大寺・薬師寺や山城国海印寺などを軸に、一定の重要な位置をしめ続けた。

参考文献

- 青木隆「地論と撰論の思想史的意義」『新アジア仏教史07 中国Ⅱ隋唐 興隆・発展する仏教』校成出版社、2010年。
- 家永三郎「東大寺大仏の仏身をめぐる諸問題」朝枝善照編『律令国家と仏教』雄山閣、1994年（初出1938年）。
- 石井公成96a「新羅の華嚴思想」同『華嚴思想の研究』春秋社、1996年
- 同96b「地論宗における『華嚴經』解釈」同上書所収、1996年。
- 金天鶴「平安時代における東大寺・薬師寺の華嚴学の相違」『南都佛教』86、2005年。
- 同「薬師寺長朗の華嚴思想について」『印度学學佛教学研究』55-2、2007年。
- 栄原永遠男「天平六年の聖武天皇発願一切經」同『奈良時代の写經と内裏』塙書房、2000年、初出1994年。
- 高崎直道「花嚴思想の展開」『講座・大乘仏教3 華嚴思想』春秋社、1983年。
- 田中嗣人「河内智識寺の盧舎那仏—日本彫塑史研究の一齣—」『文化學年報』26、1977年。
- 直木孝次郎「天平十七年における宇佐八幡と東大寺の関係」『続日本紀研究』2-10、1955年。
- 中林隆之07a「悔過法要と古代王権—神仏習合と悔過—」『日本古代国家の仏教編成』塙書房、2007年。
- 同07b「『花嚴經為本』の一切經法会体制」同上書所収、2007年。
- 同11「東アジア<政治—宗教>世界の形成と日本古代国家」『歴史学研究』885、2011年。
- 同13a「寺院・僧侶の仏典と古代国家」『經典目録よりみた古代国家の宗教編成策に関する多面的研究』2010~2012年度科学研究費補助金基盤研究(C) (課題番号22520659) 研究成果報告書(研究代表:中林隆之)、2013年。
- 同13b「南都仏教から平安諸宗へ—「五宗録」からみた平安前期の王権・国家と仏教—」、同上。
- 同15「日本古代の「知」の編成と仏典・漢籍—更可請章疏等目録の検討より—」『国立歴史民俗博物館研究報告』194、2015年。
- 朴享國「朝鮮半島の仏教美術 七 渤海の仏教美術」『新アジア仏教史10 朝鮮半島・ベトナム 漢字文化圏への広がり』校成出版社、2010年。
- 堀池春峰「華嚴經講説よりみた良弁と審詳」『南都仏教史の研究 上<東大寺篇>』、法蔵館、1980年（初出1973年）。
- 松本史朗「如来蔵思想は仏教にあらず」同『縁起と空』大蔵出版、1989年（初出1986年）。
- 皆川完一「光明皇后願經五月一日經の書写について」『正倉院文書と古代中世史料の研究』吉川弘文館、2012年（初出1962年）。
- 宮崎健司「東大寺の『華嚴經』講説」同『日本古代の写經と社会』塙書房、2006年。

【表】「華嚴宗布施法定文案」(続々修 41-2、『大日本古文書』11-557-568)

經論部

	經典名	卷数	用紙(枚)	布施(貫)	五宗録
1	大方広仏華嚴經六十卷	60	1103	100	
2	大方広仏華嚴經八十卷	80	1562	140	
3	信力入印法門經五卷	5	102		
4	度諸仏境界智光嚴經一卷(或二卷)	1	18		
5	仏華嚴入如来德智不思議境界經二卷	2	24		
6	大方広仏華嚴經修慈分一卷	1	9		
7	庄嚴菩提心經一卷	1	7		
8	大方広菩薩十地經一卷	1	8		
9	□(兜力)妙(沙力)經一卷	1	6		
10	□(菩薩力)本業經一卷	1	13		
11	諸菩薩求仏本業經一卷	1	11		
12	菩薩十住經一卷	1	5		
13	漸備一切智徳經五卷	5	114	小計40	
14	十住經四卷(或五卷)	4	113		
15	等目菩薩所問三昧經三卷(或二卷)	3	62		
16	□功德經一卷	1	2		
17	□卷	4	70		
18	度世品經六卷(或五卷)	6	137	小計40	
19	羅摩伽經三卷	3	84		
20	楞伽阿跋多羅宝經四卷	4	109	小計40	
21	注楞伽阿跋多羅宝經七卷(不入例者)	7	184	—	
22	入楞伽經十卷	10	187	40	
23	大薩遮尼乾子所説經十卷	10	151	40	
24	諸法無行經二卷(或一卷)	2	34		
25	入法界体性經一卷(或入法界經)	1	12		
26	大方等如来蔵經一卷	1	11		
27	十住断結經十卷	10	273	小計30	
28	不増不減經一卷	1	7		
29	金剛三昧經二卷	2	27		
30	菩薩纓絡本業經二卷	2	45		
31	法界体性無分別經二卷	2	32		
32	大方広如来性起微密蔵經二卷	2	61	小計30	
33	十住毘婆沙論十四卷(又無論字 又十二卷又十五卷)	14	299	40	華嚴1
34	十地經論十二卷(又十五卷)	14	282	40	華嚴3
35	一乘究竟宝性論四卷[一乘仏性権実論三卷](又云宝性分別七乗増上論、又三卷 又五卷)	4	104		三論65(6卷)
36	大乘起信論一卷	1	26		華嚴9
37	大乘起信論二卷	2	29		華嚴10
38	法界無差別論一卷	1	8		華嚴7
39	入大乘論二卷	2	47		
40	三無性論二卷(出无相論 題云三無性論品)	2	41	小計50	

【表】「華嚴宗布施法定文案」(続き)

章疏部

	經典名	巻数	用紙(枚)	布施(貫)	五宗録
41	華嚴經疏 一部二十巻 法蔵師述	20	1057	50	華嚴18
42	華嚴經疏 一部二十四巻 惠苑師述	24	1044	40	華嚴19(16巻)
43	華嚴經疏 一部二十巻 宗壹師述	20	800	35	華嚴23
44	華嚴經疏 一部十巻 元暁師述	10	296	30	華嚴21
45	華嚴經方軌 一部五巻 智蔵師述	5	199	10	華嚴22
46	入楞伽經疏 一部八巻 元暁師述	8	260	20	華嚴94・法相 58(ともに7 巻)
47	入楞伽經疏 一部十二巻 尚徳師述	12	621	20	
48	入楞伽經疏 一部五巻 菩提留支述	5	225	15	
49	四巻楞伽經疏 一部八巻 杜行鏡述	8	345	20	
50	又一部五巻 菩提達摩述	5	181		
51	四巻楞伽經科文 一部二巻 菩提達摩述	2	76		
52	四巻楞伽經抄 一部二巻	2	69		
53	如来蔵經疏 一部二巻 衍法師述	2	25		
54	不増不減經疏 一巻元暁師述	1	31	小計25	法相60
55	十地論疏 一部七巻 慧遠師述	7	483	20	華嚴113
56	起信論疏 二巻法蔵師述	2	100		華嚴99
57	起信論疏 三巻延法師述	3	120		華嚴103
58	起信論疏 一巻曇遷師述	1	40		華嚴106
59	无差別論疏 一部一巻法蔵師述	1	50		華嚴112
60	起信論疏 一巻青丘大行述	1	20		華嚴100・105
61	起信論疏 二巻惠遠師述	2	81	小計25	華嚴101
62	起信論疏 一部二巻元暁師述	2	75		華嚴102
63	起信論別記 一巻元暁師述	1	38		華嚴108
64	金剛三昧論 一部三巻元暁師述	3	107	小計25	華嚴16
65	華嚴經論 一部五十巻且来者靈弁師述	50	1275	90	華嚴6(100)
66	十地五門実相論 一部六巻 十地五門師述	6	120	8	華嚴8
67	一道章 一巻元暁師述	1	40		華嚴123
68	十門和諍論 一部二巻元暁師述	2	60		華嚴126
69	二障章 一巻 元暁師述	1	50		華嚴122
70	大乘止観論 一部二巻 遷禪師述	2	70		華嚴119
71	宝性論宗要 一巻 元暁師述	1	40	小計25	
72	華嚴經旨帰 一巻 法蔵師述	1	21		
73	華嚴綱目 一巻 法蔵師述	1	25		華嚴44
74	華嚴関脉義記 一巻 法蔵師述	1	9		華嚴64
75	華嚴遊心法界記 一巻 法蔵師述	1	19		華嚴62
76	華嚴玄義章 一巻 法蔵師述	1	16		華嚴58
77	華嚴発菩提心義 一巻 法蔵師述	1	12		華嚴63
78	華嚴七所八会 一巻	1	31		
79	華嚴文義要決 一巻 表員師集	1	14	小計25	華嚴65
80	華嚴問答 一巻 智蔵師述	1	50		華嚴49
81	華嚴孔目 一部四巻 智蔵師述	4	54		華嚴48
82	一乘法界図 一巻	1	13	小計15	
83	華嚴伝 一部五巻 法蔵師述	5	49		華嚴86
84	華嚴一乗教分記 一部三巻 法蔵師述	3	67	小計25	華嚴57

注)「五宗録」の項目は、「華嚴宗布施法定文案」と、延喜14年(914)撰「五宗録」に掲載された仏典との重複関係を略記したもの。「五宗録」段階の各宗(華嚴・三論・法相)章疏録に配属されたもの同一の典籍の場合、該当宗の章疏目録の配属順(アラビア数字)とともに示した。